



梅雨が明けて県内各地で海が開き、海水浴場がにぎわいを見せている。

こんな夏をもたらしてくれるのは、小笠原高気圧のお陰である。この高気圧は北太平洋高気圧の西端に位置し、フィリピン付近の対流活動が強いほど、安定な高気圧になる。高気圧から吹き出す南西風は蒸し暑い、サーファーには絶好の「うねり」をもたらす。

しかしながら台風がかなり南にあっても「うねり」は長旅をして鹿島灘にもやって来るので、

2015.7.26



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

海開き

台風の接近時は注意が必要だ。何分かの間には「一発大波」と呼ばれるとんでもない高波が来て、時おり釣り人もさらわれるからだ。

海水浴で注意しなければならないのは「離岸流」と呼ばれる、岸から沖合いに向かう流れである。これに巻き込まれるとあっという間に沖に流される。

岸に戻ろうといくら泳いでも、沖に向かう流れと帳消しになってほとんど前に進まない。離岸流は、鹿島灘でも見られる漂砂防止のT字型の突堤の周辺でも起きるので要注意だ。

他方、灼熱（しゃくねつ）の夏の太陽は地表に紫外線を浴びせる。目や皮膚に有害な紫外線は上空のオゾン層で吸収されるが、UV-Bと呼ばれる紫外線は地表に届いて日焼けを起こしやすい。素肌を焼くのもほどほどに。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)



撮影・海老沢次雄

蒸し暑い日が続くと、体にこたえる。草木への水やりも大変だ。そんな日の「俄(にわか)雨」は助かる。俄雨は入道雲のお土産であり、通常は1時間足らずで止む。夕方に起きれば「夕立」と呼ばれる。しかし激しい俄雨はしばしば雷まで発達する。雷には「熱雷」と「界雷」の二つがある。

前者は強い日射で地面が暖められ、上昇気流が生まれ、積乱雲まで発達し発雷に至る。真夏に起きやすい。後者は寒冷前線が通過する場合で、冷たい空気が前方の空気の下に潜り込み強制的に持ち上げ、線状に並ぶ積乱雲や雷を起こすが夏には少ない。熱雷は上空に冷たい空気が侵入

2015.8.2



「気象コンパス」主宰

古川 武彦

雷三日

するほど激しくなる。冷たい空気は密度が大きいので、何かきっかけがあれば激しい対流をもたらすからだ。竜巻の可能性もある。

今日も雷、明日も雷と続く場合、「雷三日」と呼ばれる。これは上空に寒気を伴う低気圧がゆっくり東進する場合に起きる。寒気が東に抜けるまでの数日間、大気は非常に不安定だから雷の起きやすい状況も2、3日持続するので「雷三日」となる。一過性の俄雨や雷と異なる。

雷鳴は毎秒約300m/sの音速で伝わる。ぴかっと光って10秒でドーンとなったら、雷雲は約3km/sの近さだ。平地に居続けるのは危険だし、樹木の直下に入るのも良くない。落雷の電流が体を通り抜けることがあるからだ。体を低くして、近くの建物に避難するべきだ。

(元気象庁予報課長、理学博士、鹿嶋市在住)